

## 企業における大学院での学びの実践

クラシエ製薬株式会社  
漢方研究所 製品開発第二グループ

小林 志 寿

私は2012年に工学研究科生命先端工学専攻博士後期課程を修了しました。クラシエ製薬株式会社に勤務して二年が経ち、漢方薬や生薬の研究・製品開発に関わっています。最近、日経産業新聞の記事（2014年3月29日）に取り上げて頂きました。その経緯で、恩師の福崎先生の格言が企業にて大変役立ちました。数多くある福崎先生の格言の中から実践的であった次の三点、「斬新なテーマを提案せよ」、「リーダーになれ」、「アウトプットを大事にせよ」についてご説明したいと思います。

まず、一つ目は「斬新なテーマを提案せよ」です。私の現在の配属先である製品開発第二グループは、基礎から商品開発まで幅広いテーマを担っています。私は積極的に上司にも参考文献を持って行き、研究の方向性について議論するよう心がけています。その私の普段の行動のためか、上司から「提案するの好きやろ、これ行ってみたら（上司は関西ご出身の方です）」とクラシエ社内の三事業（製薬、食品、ホームプロダクト）の研究所交流会に推薦されました。「テーマ提案」の課題については大学院で福崎先生の授業を取ったことのある方ならご存知かもしれません。福崎先生は学生の自主性を大事にされており、学生が斬新なテーマを提案する課題を授業で与えて下さいました。もちろん、研究室でも私を含め学生はテーマを考え、ディスカッションを行う機会を頂きました。この大学での経験は、企業にて新たな視点を発見し、その発見を上司や周囲に発信する過程に役立ちました。

二つ目は「リーダーになれ」です。三研究所交流会では自分の研究所の研究紹介を行いました。最終日には、私が入社してからテーマ提案を行って始まった研究を発表しました。最初、グループ長からこのテーマについて期限までに意見を考えてくるようにと、グループメンバーに指示がありました。私は、期限までに個々で考えるより、一度チームメンバーで話し合ったほうが効率的と考えて、チームメンバーでのディスカッションの手配をしました。その時は入社して一年経たない程の新入社員でしたが、上司となるチームメンバーの協力を得て、ディスカッションのテーマの方向性を明確にできまし

た。現在、私はこの時のテーマをメインに研究しています。この行動の背景には、大学院で学生のチームリーダーとして責任を持って行動をさせて頂いた経験がありました。

最後は「アウトプットを大事にせよ」です。三研究所交流会での最終発表の後、急きょ、日経の記者の方が弊社の研究所を訪問され、私も同席しました。そのご訪問の前には、三研究所交流会についてお話する予定はありませんでした。実際に、お話する中で「小林さん、製薬会社で在籍なのに工学博士をお持ちなんですか？」、「小林さんは何歳ですか？」と私に興味を持って頂きました。（記事のためにはディテールが大事だそうです。）質問には、現クラシエグループの前身の会社であるカネボウからクラシエへの変遷の話がありました。弊社の三研究所が続けて来たことには、部門ごとの研究員を集めての共同での商品開発があります。その歴史を汲む今回の三研究所交流会についても当然、話が及び、私がお答えしました。話題は、「普段のお仕事についてどう思われていますか？」、「小林さんの夢は？」という流れになり、博士課程を修了した私としては公聴会に挑む気持ちでした。同席した上司二人は私の回答に息をのんでいました。このような当日の流れもあり、二年目にして記事に頂くという光栄な機会を得ました。このインタビューの時も、大学院時代のアウトプットのトレーニングの成果を生かすことができました。福崎研では発表の機会が大変多く、研究を通して日々、発表の訓練をさせて頂いたことに改めて感謝の念を覚えました。

以上の三点について、私は大学時代に培った経験を企業での職務に活用できました。恩師の福崎先生は企業ご出身であったため、博士課程から企業に就職しても二、三年目の社員を圧倒できる学生を育成したいと日々おっしゃっていたことを懐かしく思います。その言葉を忘れず、これからも新しいことに挑戦し続けたいと思います。最後になりましたが、このような寄稿の機会を下さいました恩師・福崎英一郎先生に御礼申し上げます。

（生命先端 平成24年後期）